

ヨセフ年閉年ミサ



2021年12月8日(水) 10時、大阪カテドラル聖マリア大聖堂で、ヨセフ年の閉幕を告げるミサが非公開で行われた。

主司式の前田万葉大司教は「ヨセフ年」の起源をミサ説教で説明。1870年、150年前の無原罪の聖マリアの日、教皇福者ピオ9世は聖ヨセフを「カトリック教会の保護者」と宣言。この節目を記念するために、教皇フランシスコは昨年一年を「ヨセフ年」と定められ、使徒的書簡『父の心で』を発表された。

本紙では一年、前田大司教の発案で「聖ヨセフとわたし」のコーナーをもうけ、「ヨセフ」の霊名をもつ司祭、助祭、修道者にご執筆いただいた。最終回には大司教にも聖ヨセフへの想いをつづっていただいた。

ミサの最後は『父の心で』に示された教皇の祈りでむすばれた。「……聖ヨセフよ、父親としての姿をわたしたちにも示し、日々の歩みを導いてください。恵みといつくしみと勇気が与えられ、すべての悪から守られるようお祈りください。アーメン」。

ミサ動画視聴▶



野崎観音の謎

隠れキリシタンの寺か!?
神田宏太

竹延真治神父から
この一冊

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は竹延真治神父様(しろうきたブロック、クラレチア宣教教会)が担当。



その12

『野崎観音の謎 隠れキリシタンの寺か!?』(神田宏太著、文芸社、2008年、税込1430円)

青年の皆さんは誰一人ご存知ないと思うが、70歳以上の人なら、東海林太郎という歌手が歌っていた『野崎小唄』という懐メロを口ずさむことができるだろう。「野崎参りは屋形船でまいる。音にきこえた観音ござる……♪」という歌詞の曲である。

この本の著者は、その野崎観音近くの教会で牧師をされていた故神田宏大先生だ。背後の標高300メートルあまりの飯盛山には、16世紀半ばに三好長慶という武将が城を築き、そこから近畿地方一円を支配していた。1563年には長慶配下の武将74名がガスバル・ヴィレラ神父から飯盛城で洗礼を受けたこ

と、受洗した武將の幾人かが自分の領地に教会を建てたことから、河内地方には6000人近くのキリシタンが存在し、教会の歴史は長崎県の平戸には遅れるが、長崎市内よりは古いことが史実として知られている。

しかしながら、本書ではさらに「野崎観音はキリシタンのために建てられた寺だ」と神田牧師は推論する。ネタバレになるのでここには記さないが、神田牧師はいくつもの状況証拠を挙げ、野崎観音と河内キリシタンの関係をするべく考察する。生前の神田牧師から直接お話をうかがうことができた私は「野崎観音の謎」がナゾではなく真実であると思えるようになった。

この本は、おそらく書店から取り寄せてもらわないと入手できないと思う。値段は消費税抜きで1300

円であるが、活字も大きく2時間ほどで読み切ることができる。河内キリシタン入門の書としても隠れキリシタンについての手ほどきの書としても推薦する。

本書を読んでくださった大阪の青年信者が「自分は大阪出身のカトリック信者である」ことに誇りを持つてくださった望外の喜びだ。大阪の青年に限らず、

本書を読んで河内キリシタンに興味を持たれた方は、ぜひカトリック大東教会に御連絡ください。この本に紹介されているいくつかの場所に時間が許す限り、私が御案内します(徒歩で約1〜3時間)。

次回は、申(しん)繁(しば)時(とき)神父様(高松教区派遣、南予ブロック協力)です。



若者の読書感想文募集

- ① 年齢は35歳まで。カトリック信者、もしくはカトリック教会と何らかの関係がある方(カトリック校や諸施設の在籍者又は卒業生、保護者、関係者など)。
- ② 感想は4000字程度。氏名と所属、顔写真(自由)を添えてメール(jiho@sakakacatholic.or.jp)か郵便にて送付(掲載にあたり編集する場合あり)。
- ③ 感想を送ってくださった方全員に教区オリジナルしおり(4枚組)を進呈。たくさんのご投稿をお待ちしています。



「信仰の時間」

ABCラジオ(朝日放送)
毎週日曜日 5:50~6:00AM

11月担当: 春名 昌哉 神父
(堺ブロック)

回心して「待つ」

(28日放送分より)



待降節の「待つ」という言葉には二つの意味があります。一つ目は、キリストが私たちのもとへ人となられて来られるのを「待つ」こと。そしてもう一つは、終わりの時にキリストが再び私たちのもとに来られるのを「待つ」ということです。

主の降誕を待つことは楽しいことばかりを考えることはありません。洗礼者ヨハネはその大切さを私たちに示してくれています。「悔い改めよ。天の国は近づいた」今、目の前に近づいている救いを前に、私たちは悔い改めて、清い心を準備しなければならない。ヨハネは私たちに救い主を迎えるにあたって、回心してその時を待つ

ように教えています。

教会では「回心」ということばがよく使われます。「心を改める」と書いての改心ではなく、「心を回す」と書いて「回心」です。私たちはこのことばの意味をどのようにとらえているのでしょうか。日常生活においては心を改める方の「改心」のほうがよく使われます。それまでの自分を悔い改めて再出発をするときに私たちはこの「回心」ということばを使います。

では心を回す「回心」も同じような意味として私たちは受けとめていないのでしょうか。「回心」とは単に悔い改めることを指すのではなく、悔い改めて再び神の方へ心を回すことです。罪を犯した人

間の心は、神さまから正反対の方向を向いています。神さまのことなど忘れて自己中心的に生きようとする人間の態度です。しかし、そのような自分を心から悔い改めて、再び神さまの方へ心に向け直すことこそが「回心」することなのです。

今、自分の行いに気づいて「回心」すれば必ず救いの恵みにあずかることができる。洗礼者ヨハネは洗礼を受けに来たファリサイ派や律法学者たちに「『我々の父はアブラハムだ』などと思ってみよ。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる(マタイ3・9)」と厳しいことばを投げかけています。自分の立場にあぐらをかき、見せかけだけの「回心」など何の意味も持たない。洗礼者ヨハネは心からの「回心」を人びとに求めたのです。

待降節に私たちがふさわしい心を準備して「待つ」ということは、キリストが示してくださった道を再確認し、主に従う心を新たにす

ることです。それは自己中心的に生きることではなく、神の望みを私たちがこの地上に実現していくための歩みです。神が私たちに何を望んでおられるのか、そして私たちが何をなすべきなのかを神さまの言葉によって黙想し、識別する必要があります。

そのためには私たちが常に「回心」の道を歩むことが大切です。「回心」して心を神さまにしっかりと向け直すことが「待つ」時を過ごし始める第一歩になるのです。私たちの周りにおられる最も小さな人々の中にキリストを感じ、その人びとのために自分ができることを精一杯行うよう心がけ、そしていつ主がこられてもいように、私たちの心をふさわしく準備しながら待ちましょう。

